

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：47501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00226

研究課題名（和文）国際美術展「ドクメンタ」の運営システムに関する研究

研究課題名（英文）A study on the management of international exhibition "documenta"

研究代表者

山口 祥平（YAMAGUCHI, Shohei）

大分県立芸術文化短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：60376910

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国際美術展「ドクメンタ」における芸術監督制とその形成過程を考察した。コロナ禍での海外渡航制限期には主にインターネットでの資料調査に従事し、展覧会カタログや先行研究論文、雑誌記事などの文献資料を分析した。渡航制限緩和後は、本展の資料館「ドクメンタ・アーカイヴ」での調査を行い、運営会議録などを検討した。研究を通して、展覧会創設初期におけるアーノルド・ボーデが広範な業務に従事していたことが明らかとなった。彼の活動が本展における芸術監督のロールモデルを形成していたことを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通して、ドクメンタにおける芸術監督の権限の広範さとその歴史的背景を確認した。世界各地で数多くの国際美術展が開催されるなかで、ドクメンタがまだ独自の地位を確立できている要因のひとつにはその芸術監督制がある。展覧会の類似や画一化が指摘されるなかで、本研究は、国際美術展の企画運営における芸術監督制のひとつのあり方を提供する。

研究成果の概要（英文）：This study examined the artistic director system and its formation process at the international art exhibition "documenta". During the period of overseas travel restrictions due to the Corona Disaster, I was engaged mainly in research of materials via the Internet, analyzing exhibition catalogs, previous research papers, journal articles, and other materials. After the travel restrictions were eased, I visited the documenta Archives, the exhibition's archive, for this research, reviewed the minutes of management meetings. Through this research, the wide-ranging activities by the exhibition's founder, Arnold Bode, formed the basis for the role model of the exhibition's artistic director.

研究分野：アートマネジメント

キーワード：文化政策 国際展 芸術監督

## 1. 研究開始当初の背景

近年、国内外で「芸術祭」「ビエンナーレ」「トリエンナーレ」等の国際美術展（以下、国際美術展）が開催されている。国際美術展では、世界で活躍する新進気鋭のアーティストらを招集し、彼らの作品が華々しく地域の風景を彩る。アート作品によって時限的に変容する地域を見に多くのアート愛好者や観光客が足を運ぶ。国内でも2000年以降、多数の国際美術展が開催されるようになったが、その多くは経済衰退に悩む地方自治体が観光誘客事業を目的として始めたものも少なくない。こうした地方振興によって始められた展覧会は、事業の「経済効果」や「地域再生」の成果が強調される一方で、美術展としての社会的意義や質的な評価を看過する傾向もある。国際美術展の公的な実施説明として地域振興の視点も重要である。しかし、国際美術展が同時代のアーティストたちの作品を通して現に目の前に問題やテーマを検討する側面について目を向ける必要がある（貞包 2016）。世界に国際美術展が乱立し展覧会としての類似性や画一性も指摘されはじめている。今あらためて、国際美術展が本質的に内包する展覧会としての社会的価値を再考する機会でもある。

本研究では国際美術展の社会的価値を巡って、ドイツの国際展ドクメンタを対象に展覧会のテーマ設定に関わる運営システムを考察する。ドクメンタはドイツ・カッセルで5年に一度開催される国際美術展である。開催ごとに選出される芸術監督は同時代をテーマとして展覧会を通して社会にメッセージを発する。ドクメンタのテーマは国内外に発信され、開催地であるカッセルには世界中からアート愛好家が訪れる（2022年78万人）。1955年にはじまり、創設から60年の間に独創性のある芸術監督が選任され、常に話題性のあるテーマを設定し、参加アーティストたちとともに世界に強いメッセージを発し続けてきた。ドクメンタの独自性はまさにそのテーマそのものともいえる。芸術監督の独創性を最大限実現するために、ドクメンタでは展覧会専属の実務組織「ドクメンタ有限会社」を設置している。芸術監督制を採用する国際美術展は世界中に多数存在するが、専属の運営機関を有している事例は多くない。本研究では国際美術展の社会的意義を検討するにあたり、ドクメンタの芸術監督制と運営会社の仕組みに着目し、本システムが展覧会の国際的発信力の源となるという仮説をたて研究を進める。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は国際美術展の社会的価値をめぐりドクメンタの運営システム調査を通して国際美術展運営の参照事例を提示することである。本展に関する従来の研究成果は国内では主に展覧会レポートや批評が中心であり、運営面の検討事例は少ない。運営に関する先行研究としては、鈴木(2009)によるドクメンタ創設時における展示空間デザインの考察が新しいが、創設後の運営体制の展開に関する研究は管見のところ少ない。本研究では主にドクメンタの芸術監督制と有限会社の役割に焦点をあて、本展が国内外に社会的メッセージを発信し、国際的な影響力を有するようになった背景および要因を明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究ではドクメンタ有限会社による芸術監督制の考察のため、現地でのアーカイヴ調査と文献調査を行った。2020年初頭に始まった新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、当初予定を変更した。研究期間2年目から4年目にあたっては国内での文献調査やインターネットの公開情報を活用しながら研究を進め、最終年度にアーカイヴ調査を実施した。国内研究期間には、主にドクメンタに関して新規に公表された出版資料およびインターネット情報を中心に調査を行った。2020年以降ドクメンタに関する研究書が次々に出版されたため、1950年代の創設期に関する状況が明らかになった。研究所の出版とあわせて関連資料の所在も明らかになったことは本研究課題を進めていくうえで有益であった。またインターネット上の情報もドクメンタ有限会社がホームページでの情報発信を強化したため、従来、インターネットでは取得できなかった運営進捗を把握できるようになり、芸術監督の選出からテーマ設定、企画チーム編成過程に関する情報を得られた。国内調査を踏まえて、最終年度に2022年9月にドクメンタアーカイヴでの現地調査を行った。アーカイヴ調査では主に展覧会の運営会議議事録や芸術監督とドクメンタ有限会社との通信記録などを確認した。

### 4. 研究の成果

本研究では、ドクメンタの運営システムをめぐって、芸術監督の業務モデルに焦点をあてその成立過程を明らかにした。研究を通して、ドクメンタの芸術監督制には、創設当初の芸術監督であるアーノルド・ボーデの影響が色濃く残っていることを確認した。ドクメンタの芸術監督は、展覧会運営に関する広範な権限をもつことを特徴とする。その業務モデルが成立する過程には、第1回から第4回までのボーデによる芸術監督の業務が基盤となっている。ボーデは芸術監督として作品や作家選定に関わるのみならず、展示空間デザインからアーティストとの交渉やステークホルダーとの調整など、広範な業務に従事していたことが文献や資料調査から判明した。芸術監督ボーデの業務モデルがその後第5回展以降継承され、芸術監督に広範な権限を付与するシステムが成立したと考えられる。芸術監督の業務モデルの成立過程が明らかになる一方で、ドクメンタ有限会社におけるその他の運営組織の編成および業務内容に関しては十分な調査に至っていない。とりわけ、芸術監督と監督のテーマや構想を実現する運営組織（ドクメンタ有限会社）との連携状況に関して、ドクメンタの独創性を保持するためにも重要な要件であるため、引き続き考察を深めていきたい。

### 参考文献

- 貞包英之(2016)「アートと地方の危険な関係～「アートフェス」いつまで続くのか？」現代ビジネスオンライン
- 鈴木幹雄(2009)「アーノルト・ボーデとカッセル・ドクメンタへの刺激について」、鈴木幹雄・長谷川哲哉・金子宣正『パウハウスと戦後ドイツ芸術大学改革』風間書房、pp.229-248

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山口祥平	4. 巻 22号
2. 論文標題 国際美術展におけるアーカイブの一考察 「ドクメンタ」を事例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アートマネジメント研究	6. 最初と最後の頁 8 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口祥平
2. 発表標題 ドクメンタにおける芸術監督制の形成過程に関する考察
3. 学会等名 日本アートマネジメント学会九州支部、文化経済学会 日本九州部会 研究発表会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------